

10. 彦根（滋賀県彦根市）

社会

彦根市は、琵琶湖の東北部に位置し、西は琵琶湖、東は滋賀県犬上郡多賀町や甲良町、豊郷町、愛知郡愛荘町など、北は米原市、南は東近江市に面している。

「彦根」の地名は、むかし天照大神の御子に天津彦根命、活津彦根命の二神がいて、このうち活津彦根命が活津彦根明神として彦根山に祭られたことに由来しているとされている。

彦根は古くから、交通や戦略上の要衝として栄えていた。慶長5年（1600年）、徳川四天王の一人、井伊直政が佐和山城主となり、彦根藩の基礎が築かれた。慶長12年（1607年）、井伊直孝が金亀山に彦根城を築き、彦根は城下町として発展していった。

昭和12年（1937年）に市制が施行され、その後8町村と合併して、昭和43年（1968年）に現在の彦根市となった。

主要産業として、仏壇、バルブ、ファンデーション（補正下着）があげられる。特にファンデーションは、戦前の繊維産業を生かした足袋製造から女性下着製造へと転換し、高い縫製技術が支持されている。

特産物には、彦根梨、鮎ずし、あゆ、紅かぶらなどがある。

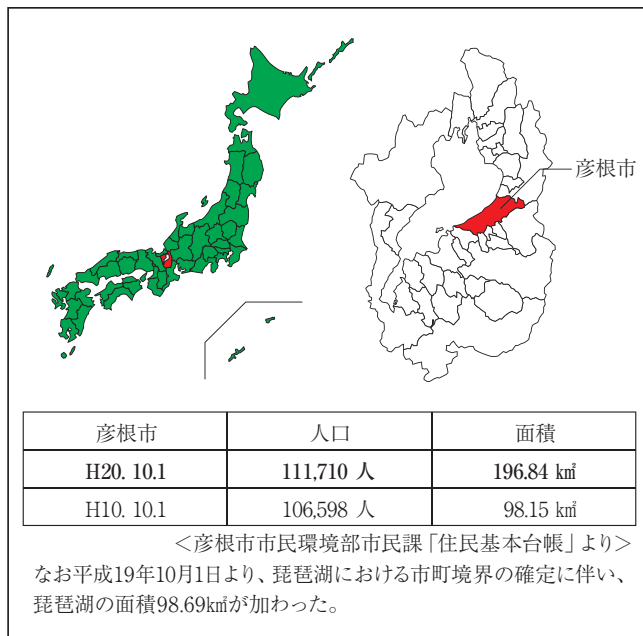
自然

鈴鹿山脈を源にする芹川、犬上川、宇曾川、愛知川が彦根市内を横切って、琵琶湖に注いでいる。このため彦根市域の3分の2以上は、河川の土砂によって形成された低地である。愛知川と犬上川によって形成された広大な扇状地は、保水力が低く水田には適していなかったが、現在は豊かな穀倉地帯になっている。

琵琶湖沿いには、かつて松原湖、野田沼、曾根沼などの内湖があったが、そのほとんどは干拓事業により農地などになっている。現在、曾根沼、神上沼、野田沼のほか、溜め池が22ヶ所ほど残っている。

彦根市では、「彦根市で大切にすべき野生生物」のうち328種を貴重種として選定し、「レッドデータブックひこね」にまとめた。

彦根市の森林面積は2,540haで、森林率は約12%である。そのほとんどはミズナラやクマシデ、コナラやアベマキなど落葉広葉樹林で占められている。山地下部や丘陵にはアカマツ林が多く、照葉樹林はほとんど現存せず、社寺の境内や彦根城などにコジイ林やタブ林が残るだけである。また平野部は、沖積低地で過湿なことから森林が少なく、犬上川や愛知川などの河川沿いにケヤキやムクノキを主とする河辺林が植生している。



気候

彦根市は、琵琶湖の影響により、夏は気温の上昇、冬は気温の低下が抑制されるため、年平均気温が14.4℃、年間降水量が1,617.9 mmと温暖である。しかし湖岸部では、若狭湾から流入される寒気の影響を受けるため、北西の季節風が強く吹き、気温が下がりやすい。

風土

市街地の中央に国宝彦根城がそびえ、東に石田三成ゆかりの佐和山城跡がある。彦根城を中心に城下町が形成され、町割りなどに往時の面影が色濃く残されている。特に歴代の彦根藩主が幕府の要職に就いていたことから、江戸の文化が多く伝わり、江戸の雰囲気漂う町として「小江戸彦根」とも呼ばれている。

また彦根城にある時報鐘と、秋に聞こえる城内玄宮園の虫の鳴き声は、「彦根城の時報鐘と虫の声」として「残したい“日本の音風景100選”」に選定されている。

犬上川の伏流川として湧き出している水は、「十王村の水」として「名水百選」に選定されている。

文化

禅寺として有名な龍潭寺では、4月1日～2日に「だるままつり」が行われる。この祭りでは、大衆の慈悲と救済を祈願して、起き上がり小坊師のだるま3,000～5,000体を並べ、入魂式を行う。

9月には、彦根城内でスズムシやマツムシなどの虫の鳴き声を聞く、「玄宮園で虫の音を聞く会」が行われる。

そして10月下旬には、彦根市最大のイベントである「彦根の城まつり」が行われる。この祭りは、井伊直弼の生誕日（10月29日）を記念して行われ、江戸時代の大名行列や風俗行列、鎧をはじめ武器を全部赤で統一し、「赤備え」と恐れられた彦根藩の赤鬼家臣団列などが市内を練り歩く。

作成にあたって参考にした文献

気象庁 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

彦根市 <http://www.city.hikone.shiga.jp/>

「平成20年版 彦根市の環境」 <http://www.city.hikone.shiga.jp/seikatsukankyobu/kankyo/PDF/kankyo2008.pdf>

「平成15年版 彦根市の環境」 <http://www.city.hikone.shiga.jp/seikatsukankyobu/kankyo/PDF/kankyo2003.pdf>

取り組みの概要（目的・効果など）

- 彦根市は、商工会議所などと連携して、平成 11 年に「彦根市中心市街地活性化基本計画」を策定し、江戸時代の町並みを再生した「夢京橋キャッスルロード」をはじめとする街並み整備事業に取り組んできた。また、市内や旧・中山道の宿場町で開催されるイベント等をサポートするとともに、NPO や学生のまちづくりへのかかわりを、条例改正などによってサポートしている。
- また、彦根市は、平成 20 年に「彦根市低炭素社会構築都市宣言」を告示するとともに、環境部局と交通部局が協力し、ペロタクシー（自転車タクシー）の運行許可に向けた制度改正をスムーズに行った。
- 県立大学教員、商工会議所、まちの商店主たちが「NPO 法人五環生活」を設立し、ペロタクシーをはじめとする様々な活動が進められている。
- 商店街には地元大学の「まちなか研究室」が設けられ、学生と市民の交流の場となっている。
- 旧・中山道の宿場町では、それぞれの宿場町に残る伝統や文化を甦らせるイベントが取り組まれていて、学生や市民が「まちづくり」に関わっている。

「感覚環境のまちづくり」から見た特色・魅力

- 「残したい“日本の音風景 100 選”」に選ばれた「彦根城の時報鐘」と「彦根城の旧大名庭園玄宮園の虫の音」という二つの「音」が「五感／感覚」に心地よい彦根の音風景として保存されている。
- 「NPO 法人五環生活」により、ペロタクシー、お堀の屋形船、まっくらカフェなど、環境や五感をテーマにした様々な活動が取り組まれている。
- 彦根の伝統文化の一つである「赤」色をテーマにした「まちづくり」が、旧・中山道を舞台にして、継続的に取り組まれており、宿場町の住人たちも、「色」という感覚的なテーマに対し、日常生活の範囲で関わっている。
- 学生・市民・行政の連携によって、まちづくりの取り組みが続けられている。

今後の課題・展望

- まちづくりに関わった学生たちが、持続して彦根で暮らしていける経済的な基盤を確立することが課題である。

「感覚環境のまちづくり」を訪ねて - 10

音や色、伝統文化を生かした「まちづくり」

彦根とベロタクシー

琵琶湖と鈴鹿山系に囲まれた彦根市は、江戸時代に彦根藩 35 万石の城下町として栄え、今もなお、歴史的で文化的な都市として知られている。また、中世から近世にかけての貴重な歴史文化遺産が、数多く残されていることでも名高い。

中でも、それら歴史文化遺産を代表するのが、彦根城だろう。

彦根城は、17 世紀に戦われた関ヶ原の合戦後、彦根藩初代藩主井伊直政の嫡子・直継と二代藩主・直孝によって、約 20 年の歳月をかけ築城された。白亜三層の天守閣は、姫路城、松本城、犬山城とならび、国宝四城のひとつに数えられている。

城内には、「残したい“日本の音風景 100 選”」に選ばれ、お山の鐘として市民に親しまれている彦根城の時報鐘がある。幕末期十二代藩主直亮の時、より美しい音色にするために大量の小判を投入して鑄造されたという鐘は、鐘の丸に設置されて城下に時を知らせたという。今でも定時になるとつかれ、心地よい音を響かせている。

彦根観光名所の一つ、その彦根城を眺めながらお堀端を散策していると、城への入口付近で、赤い流線型の屋根付き自転車に遭遇。さっそく、乗せてもらうことにした。この自転車が、彦根市を中心に活動を展開している「NPO 法人五環生活」が走らせているベロタクシーだ。

ベロタクシー (VELO TAXI) とは、平成 9 年にドイツで開発された高性能な自転車タクシーとその運営システムのことで、ベロ (Velo) とは、ラテン語で自転車を意味している。「五環生活」では、彦根市内に広がる城下町を、ゆったりとした速度でめぐる環境に優しい移動手段として、ベロタクシーを平成 19 年から運行している。



彦根市の象徴である国宝彦根城

ベロタクシーに乗って



自転車タクシー「ベロタクシー」

彦根城の前で客待ちをしていたベロタクシーに乗って、彦根市内を散策した。

彦根城・表門への入口付近から出発し、「夢京橋キャスルロード」を通り「四番町スクエア」を抜け、「花しょうぶ通り商店街」へと向かう、彦根観光でも人気のスポットを運転手の方に頼んで巡ってもらった。

彦根城のお堀端から「家老旧西郷家長屋門」を右手に眺めつつ京橋へと、ベロタクシーはほぼ人が歩く程度の速度で、ゆっくりと走っていく。車では味わうことのできないゆったりとした速度で

まわりの風景をしっかりと眺めつつ、運転手さんの観光ガイドを聞くことができる。ちょっと優雅な気分だ。柔らかな風を頬に心地よく感じながら、安全運転で数分、京橋の信号で停車した。

目の前に、通りを隔てて「夢京橋キャッスルロード」が広がっている。

江戸時代の町並みを再生した「夢京橋キャッスルロード」は、すべての建物が切妻屋根きりづまの町屋風に統一され、いぶし瓦・白壁・格子戸など江戸の風情が漂う「まち」に整えられている。かつてこのあたりが商人屋敷町として栄えていた頃の良さを生かそうと、道幅が広げられた。建物は江戸時代感覚の造りに建て替えられ、飲食店やブティックから一般民家まで、統一感のある街並みに整備されている。

「夢京橋キャッスルロード」をほぼ走りきると、ベロタクシーは左に曲がって路地へと入り、「四番町スクエア」のエリアにさしかかった。

「四番町スクエア」は、大正10年に公設市場として開設された市場商店街が、「大正ロマン溢れるまち」というコンセプトを掲げて生まれ変わった地域だ。「四番町スクエア」一帯の光景は、江戸時代の風情から、大正ロマンを感じさせるレトロな街の雰囲気へと変わっていく。このあたりには「ひこね食賓館・四番町ダイニング」を中心にして、たくさんの飲食店や食に関する店が集まっている。

ベロタクシーは、「四番町スクエア」の路地を抜け、銀座商店街を軽快に走って、「花しょうぶ通り商店街」に到着した。

彦根城から花しょうぶ通り商店街まで、距離にして2キロに満たない。その距離を20分ほどかけて、ゆったりとした移動を楽しむことができた。

排気ガスを出すことなく、エンジン音もない。歩く速度よりほんの少し早い程度のベロタクシーでの走行は、変化する彦根の街並みを感覚でじっくり味わいながら鑑賞するには、最も適した移動手段だといえるだろう。

その、ベロタクシーが、彦根市内を走るようになった経緯を、「NPO法人五環生活」監事でもある彦根商工会議所の安達昇次長に聞いた。

「実は、ヨーロッパで自転車が作られる100年以上前に、彦根藩士によって自転車の原型とも言える下絵『陸舟奔車りくしゅうほんしゃ』が描かれていたんですね。そんな歴史的な出来事がマスコミに取り上げられた頃、彦根の中心市街地を活性化させていくための取り組みが検討されていまして、その一つとして、ベロタクシーが話題になったんです。その後、平成19年の『彦根築城四百年祭』を前にして、環境に優しい移動手段としてベロタクシーを運行していこうという流れが本格化していきました。私は、『五環生活』も含めて、4つのNPO法人に係わっているんです。ところがNPO法人を始めとする市民からの積極的な提案が、なかなか表舞台に登場できない。そこで、なんとか自転車タクシー事業を実現したいと考えてきました。平成19年の『彦根築城四百年祭』は、そのいい機会でした。そこで、商店街の店主さんたちにも理解してもらい、利用していただくように働きかけました」（安達氏）

住民たちからの後押しもあって、平成18年に「NPO法人五環生活」が設立され、平成19年4月に「ベロタクシー彦根」の運行が開始された。

彦根市では、平成20年7月7日に「(前略)あらゆる分野において温室効果ガスの排出削減のための行動を実践することを誓い、ここに彦根市を『低炭素社会構築都市』とすることを宣言する」という「彦根市低炭素社会構築都市宣言」を告示した。市のこうした姿勢も、自然環境を優先する交通手段としてベロタクシーの運行を実現していく流れを作っていった。

「NPO法人五環生活」の取り組み

「五環生活」は、ベロタクシー以外にもさまざまな活動に取り組んでいる。そのミッションは、「五

感+環境+暮らしをコンセプトとして、環境とのかかわりをもつ様々なライフスタイルを楽しみながら体験するとともに、社会に定着させていくことをめざしています」

「自転車タクシーの運営事業」のほかにも、五環暮楽部や米づくり体験、酒造り宿泊体験、近江の桶風呂再生に取り組む「五環エコツアー事業」、「まっくらカフェ」を運営する「五環カフェ事業」、「五環ワークショップ事業」、若い人びとのネットワークづくりを進める「次代を担う人材の育成事業」などを展開中だ。



かつて使われていた桶風呂を再生



視覚以外の感覚を頼りに食べる「まっくらカフェ」

「NPO 法人五環生活」代表理事でもある滋賀県立大学環境科学部の近藤隆二郎准教授は、「こうした活動を展開する中から、地元で暮らしていく若い人材を育成し、同時に経済的な環境を整備していきたい」という。他にも、彦根商工会議所やまちの店主たちが理事や監事となり、たくさんの学生や市民たちによって、「五環生活」の活動が進められている。

こうしたNPO 法人活動を軸にした市民による連携の中から、地域ごとの特色を生かしていく、新しい「まちづくり」への取り組みも生まれている。

彦根市の「まちづくり」は、滋賀大学や滋賀県立大学などの「学」と、商店や商工会議所などの「産」業界と、「行」政を担当する彦根市とが、それぞれ自立した活動や役割を担いつつ、お互いの立場を尊重し協力していく体制に支えられ形成されてきたようだ。

「生活環境課としましては、環境改善事業への取り組みとして市民がベロタクシーを市内で運行することに賛同していました。しかし、市内で自転車を使ったタクシーを運行するには、クリアしなければならない問題があります。たとえば、道路交通法に関連して公安委員会の細則を改正する必要がありますが、通常の前め方では時間がかかってしまいます。そこで、行政サイドから改正作業がスムーズに進むよう協力させていただきました。行政として協力のできる部分があればお手伝いしていくことで、NPO 法人や市民の活動をこれからも支えていくつもりです」(彦根市生活環境課 小林重秀氏)

「五感+環境+暮らし」というコンセプトを掲げた「五環生活」の取り組みは、産業界や行政からも賛同を得ることで、ベロタクシーの運行という自立した事業を確立していった。

住み続けたい町から、観光の「まち」へ

今では近江地域の中心観光地として「ゆるキャラ」の代表「ひこにゃん」が多くの観光客を呼び込む彦根市だが、しばらく前まで彦根市の「まちづくり」コンセプトは、「住み続けたい町」だったという。

「そもそも彦根は、長く城下町として栄えてきた人の出入りが少ない都市で、外に対して閉鎖的な

傾向があったんです」（安達氏）

その彦根市が、中心市街地の空洞化対策への取り組みをきっかけに変わっていった。

平成7年に市と商工会議所が中心となり「彦根市中心市街地再生事業委員会」を設け、平成9年に「彦根市中心市街地街づくり構想・みわくのまちづくり」を、その後平成11年に「彦根市中心市街地活性化基本計画」を策定し、都市基盤、商業基盤の整備を進めていくことが決まった。

このとき同時に、彦根城を訪れる観光客を「まちなか」に誘導するための施策として「街なか観光」の促進を基本的戦略として決定した。この時期を境に彦根市は、観光を目的とした交流人口の増加を図るとともに、居住者や高齢者にもやさしい、賑わいの「まちづくり」を目指していくことになった。

その象徴的な取り組みが「夢京橋キャッスルロード」だった。

「夢京橋キャッスルロード」は、井伊家が彦根を治めた慶長8年（1603年）に城下町としての町割りを始めた地区で、「シンボルロード整備事業」として取り組まれた。当時は道幅が6メートルしかなかったため、道路幅を18メートルに拡幅するとともに、建物も住民合意の上で、全長350メートルの全街区を江戸町屋風に建て替えることに決まった。

平成10年に街区が完成したその年、彦根城の年間客数60万人に対して、夢京橋キャッスルロードを訪れた観光客は45万人に達し、近隣商店街等も加味した経済効果は18億円と算出された。

「夢京橋キャッスルロード」に続いて、平成10年度に「花しょうぶ通り商店街」のファサード整備事業が実施された。

花しょうぶ通り商店街では、200年前の寺子屋の空き店舗対策として、駄菓子屋やギャラリー、レコードショップを開店させた。平成17年10月からは、現代版寺子屋「街の駅」として、商人塾や研修の場として活用している。また平成20年5月から、商店街版チャレンジショップとして「カフェルワム」も開業した。この空間を、滋賀大学と滋賀県立大学では、「まちなか研究室」と位置づけて関わっている。

「夢京橋キャッスルロード」の後も彦根市では、彦根銀座街、彦根橋本町、登り町グリーン通り商店街、おいでやす商店街などが、大学生たちとの連携や環境といったテーマを掲げ、ファサードやアーケードなどの景観整備事業に取り組んだ。



江戸時代の町並みを再現した
「夢京橋キャッスルロード」



花しょうぶ通りにある「寺子屋
街の駅」と「まちなか研究室」

「四番町スクエア」では、街並みのデザイン・テーマを、隣接するキャッスルロードとは違う「大正ロマンを慕って」に決めた。その上で、個々の建築主の意思を尊重し、統一感のある街並みづくりを進めていった。中心となるランドマークとして、彦根の食文化を全国に紹介する複合施設で、観光

等の情報発信機能と飲食物販の商業機能とを併せ持つ「ひこね食賓館－四番町ダイニング」を平成18年5月にオープンし、街区整備を終えた。

ベロタクシーに揺られながら、これらの整備された街区を通り抜けていくと、それぞれのまちが、それなりの統一感によって景観を整備してきた歴史が伝わってくる。

膨大な費用をつぎ込んで完成したであろう景観整備事業は、街並みを前にすると、ひとまず整えられたという眺めだ。

では、この整備された街並みを生かしていく「まちづくり」は、今後どのように展開されていくのだろうか。

「夢京橋キャッスルロード」は確かに見事な景観だが、こうした江戸時代の風情を甦らせたような街並みは、今や、全国各地に散在している。

「まちづくり」の新しいソフトづくり

整備の進む「景観」について、彦根市は、こう位置づけている。

「主として視覚を中心にして認識されるまちの姿であり、さらに広く解釈すると、人々の営みやまちにおい、物的環境の肌ざわり、音を通して体験される環境など、五感をもって得られる総合的なまちを表現するもの、また、まちが歩んできた時間とともにそこで生活してきた人々の心の中の風景（心象風景）をも含んでいるといえます」（彦根市ホームページ「景観マップ」）

彦根市では、景観整備事業を、いわば「五感で感じるまちづくり」を推進していく事業の一つとして取り組んでいるようだ。

滋賀県立大学在学中から近江の暮らしについて調査し、今は「地域学」を提唱する滋賀県立大学地域づくり教育研究センターの上田洋平研究員に、彦根市やその近隣地域で暮らす人びとと共に作成している「心象絵図」づくりについて聞いた。

「新しい研究分野として『地域学』に取り組んでいます。一言でいうと、地域に根ざした知恵とか知識というものから、地域を考えていこうという方法です。私は「うぶすなの知」と名づけています。具体的な取り組みとして、地域について地域の人と共に現場で考えていくための『心象図法』を考案し、実践しています」

そう言うと、目の前に大きな絵図を広げて見せてくれた。

「現地で、老若男女の方々に、五感体験に基づいた地域の暮らしを、一枚の心象絵図に描いてもらうのが『心象図法』です。その絵図を制作していく過程を通して地域を再認識し、未来に伝えていこうと考えています。五感を使った経験を思い出し、絵図にすることで、自分の暮らしている地域の歴史や手仕事の素晴らしさに、ぜひ気づいてほしいのです」

上田氏は、現地の人びとと各地で「心象絵図」を描いてきた経験から「多くの住民が、自分の暮らしている地域のことを知る機会が少ないことに驚かされました」という。また「心象絵図を描くことで、高齢者の豊かな五感体験を地域社会に生かしていく『地域学』は、これからの『まちづくり』に活用していける」という提案もしている。

「心象絵図」を描く土台となる五感体験は、それぞれの地域が、地域ごとの特性を生かした「まちづくり」を進めていくうえで、大切な要素になるだろう。五感体験は、その地域で暮らしてきた人にとって、いつまでも忘れることのない特別な経験として、身体に記憶されているからだ。

近藤准教授も、これからの「まちづくり」には、「身体」や「五感」が大切だと指摘する。

「まず、当たり前のこととして、私たちは環境というものを身体や五感によって受け取っていると

いう現実をしっかりと自覚する必要があるでしょう。『まち』から情報を受け取る時も『まちづくり』を進めていくときも、身体や五感を通して『まち』を実感できるミッションかどうか大切なポイントだと思います。すでに、都市計画や街並み整備の名の下に、専門家が脳を働かせて机上で立案した政策を上から空間に適用していく『まちづくり』の時代は終わりを告げています。そうした計画に参画してみると、『まちづくり』の参加者が、老人・青年・子どもといった限られた分類でしか想定されていません。ところが現実には、さまざまな職業や人生経験や年齢による複数の身体によって『まち』は構成されています。これからは、そうした多様な『身体』や『五感』をセンサーにして、下から『まちづくり』に係わっていく素人たちを主人公にした時代がやってくるでしょう」（図9）

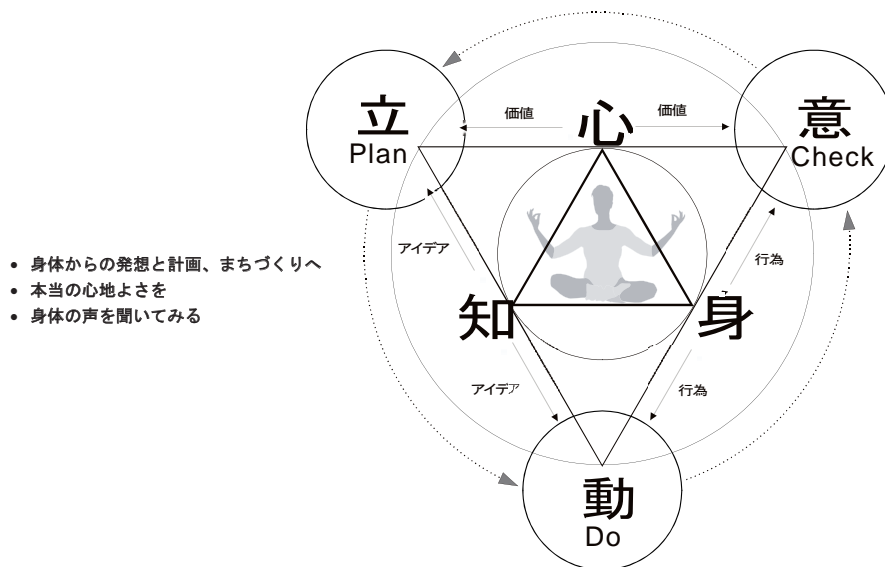


図9 身体再評価* 27

こうした新しい「まちづくり」を、住民と共に取り組んでいくための手がかりについて、さらに提言が続いた。

「そのために私は、『まち』と『身体』との関係や『五感』との係わり方を上手に表現していく新しい言葉として『パタン・ランゲージ』を創っていくことが、来るべき『まちづくり』のためのはじめの課題かな、と考えています」

「まち」と、その「まち」に暮らす人びととを繋ぐ新しい言語「パタン・ランゲージ」は、今後どのように創られ、どのような「まちづくり」へと膨らんでいくのだろうか。

「パタン・ランゲージ」とは、環境を組み立てる道具としての共通言語であり、パタンとは環境成分に関する人間の記憶の集積。それをパタン・ランゲージという文法によって組み合わせることで新たな環境を設計することができると、クリストファー・アレグサンダーが提唱した。

「もともと傷つきやすい存在である人間が、単に居心地よく暮らしていくにはどうすればよいか。経済と技術に脅かされながら、自分の居心地良さとは係わりのないシステムに追まわられるような環境を、徐々に改良するにはどうしたらよいか……使い手と造り手間に介在する余分な個性（既成専門家）の代わりに、より公明な修正に耐えるコミュニケーション道具（パタン・ランゲージ）を提案している」（平田翰那『パタン・ランゲージ』）

* 27 「五感・身体まちづくりとは」

「井伊の赤備え」と「鳥居本宿の三赤」

「まち」と「身体」とを繋ぐ言語「パタン・ランゲージ」を創造していくことから始まるという「まちづくり」の予兆を、近藤准教授の関わる、中山道の宿場町「鳥居本宿」で感じた。

平成20年10月25～26日、「とりいもと宿場まつり with 百彩－中山道・鳥居本宿の町歩きを楽しむ二日間－」というまつりを訪ねた。

近藤准教授から、「当日のテーマは、『井伊の赤備え』です」と聞いていた。

はたして「井伊の赤備え」とは？

彦根は、井伊直弼のお膝元として有名だが、その初代直政の軍兵は、甲冑・旗差物・鞍・鎧・鞭などを赤一色で統一して勇猛果敢に戦ったことから、戦場で「井伊の赤備え」と呼ばれ、当時は大いに恐れられたという。今も彦根人は、「井伊の赤備え」を故郷に伝わる伝統文化として大切にしているという。

一方、江戸から63番目の宿場町鳥居本宿も、赤玉神教丸・赤合羽・鳥居本すいかが「鳥居本宿の三赤」と呼ばれ、当時は街道筋に知れわたっていた。今でも、万治元年（1658年）創業の赤玉神教丸は、多くの人びとに胃腸薬として親しまれ、健在だ。ちょうど、その赤玉神教丸を製造する有川製薬の創業350年を記念するセレモニーも同時に開催された。

中山道の街並みを歩いていくと、あちこちの民家が、「赤」いセーター・傘・布・ペン・ランドセル・靴などの様々な品物を、玄関先や窓、格子に飾っている。きょろきょろ見ていると、自宅の前でボール遊びをしていた子どもが、赤く飾った自宅を指さして「綺麗でしょ」と言って笑いかけてきた。それぞれの家が、自由に自分のやり方で参加する「まちづくり」の姿が道沿いに広がっていた。中山道を走る車がスピードをゆるめ、赤く飾られた民家を横目で眺めつつ去っていく。



『井伊の赤備え』をテーマにした「とりいもと宿場まつり with 百彩」

「井伊の赤備え」という伝統の言葉と響き合うようにして取り組まれた、「鳥居本宿の三赤」を素材にした、住民参加の「まちづくり」が、まちで暮らしている人びとを主人公にしたまつりとして、静かに開催されていた。

「宿場町として栄えた中山道で、それぞれの町に合った『まちづくり』が取り組まれていくように、行政としてきっかけ作りをしてきました。皆さん、自分が暮らしている町の素晴らしさについて、なかなか気づく機会がないんです。それぞれの町の歴史と伝統を掘り起こし、誇りを持って暮らしていただくための土台を作っていく仕事は、行政の役割だと思い関わってきました」と、滋賀県湖東地域振興局地域振興課の善利恵子主任主事は言う。この日は、参加者の一人としてまつりを盛り上げていた。

近藤准教授は、「具体的なプロジェクトの一つとして、中山道の歴史的な伝統を生かした『まちづくり』を『百彩』と名づけて取り組んできました。『井伊の赤備え』を下地にした『色』を使った住民参加の『まちづくりプロジェクト』なのですが、自宅の前に赤い色をした何かを飾ってもらう形での参加を呼びかけました」という。

「井伊の赤備え」であり「鳥居本宿の三赤」としても住民に親しまれている「赤」という色彩が、住民を「まちづくり」と結びつけ、また、街道を通る人びとの「感覚／五感」に対しても、鮮明なメッセージを発信していた。

その、鳥居本宿の「まちづくり」を創りだした言葉「百彩」。

「井伊の赤備え」と「鳥居本宿の三赤」という伝統文化を、身近な「赤」を使った「まちづくり」へと誘っていく役割を担ってきたのが「百彩」という言葉だったのではないか。

住民たちが、「五感／感覚」を通して受け取った「赤」を、「身体」を使って積み上げていった「まちづくり」。こうした試みを各地の「まちづくり」が経験していくことによって、そのまちに固有な「パタン・ランゲージ」は生まれてくるのかもしれない。たとえば、「百彩」という言葉をテーマにして鳥居本宿の住民を「まちづくり」の行動へと促していったような新鮮な言葉を発見し、生み出していくことができれば、「まちづくり」の新しいステージは切り拓かれていくことだろう。

彦根らしさを伝える

彦根市を訪ねて見えてきたのは、整備された街並みを活用し活性化させていくためには、「まちづくり」のソフトウェアがいかに大切かということだった。また同時に、街並み整備などの取り組みが実現していない地域でも、ソフト次第で、身体や五感に訴えかける住民参加の「まちづくり」が展開できるという現場にも出会った。

「夢京橋キャッスルロード」や「四番町スクエア」といった整備地区では、その街並みを心地よく味わうためには、ベロタクシーという移動手段が最適だった。新しいソフトを活用することによって、改めて整備された街並みを楽しむことができた。

国宝の彦根城も、お堀に浮かぶ屋形船に乗りながら眺めたとき、組み上げられた石垣の歴史と共に、新鮮な発見を提供してくれる。彦根城の旧大名庭園玄宮園では、毎年9月に虫の音を聞きながら邦楽や野点^のを楽しむ「玄宮園で虫の音を聞く会」が催されている。「残したい“日本の音風景100選”」に選ばれている玄宮園の虫の音は、名月を愛でながら心地よく「音」を聴く集いとして開催されることで、訪れる人びとの五感を刺激し、彦根の素晴らしさを発見するきっかけになっている。

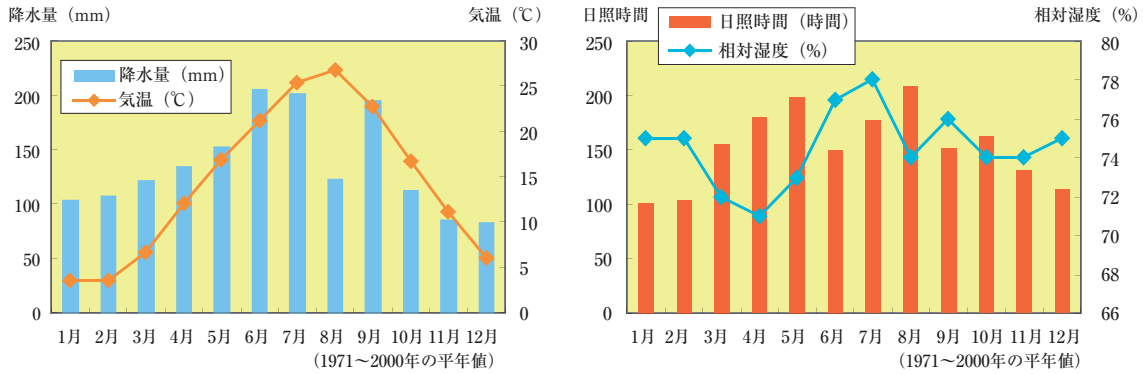
また彦根市を取り巻く近隣地域では、彦根や中山道の歴史と伝統をふまえた「まちづくり」が、住民が主人公となり、市民団体や学生も加わって続けられている。その主題として「色」が取り上げられ、「まちづくり」は「百彩」という感覚を揺さぶる言葉によって表現されている。

「NPO法人五環生活」副代表理事の竹内洋行さんは、江戸時代に彦根藩士が発明した世界最古の自転車「陸舟奔車」を復元した。現在その経験をバネに、「自分達の手で」、「彦根の技術で」、「彦根に似合う」自転車タクシーを作ろうと、プロの製造関係者と共同で「彦根リキシャ」を開発し、完成させた。まもなく伝統工芸・彦根仏壇の技術を生かしたリキシャが走行を開始する予定だ。

「彦根リキシャ」が彦根のまちを走り始めたとき、彦根は、さらに彦根らしい彩りを整えることになるだろう。そして、訪ねてくる観光客たちの身体や五感に向かって、彦根のまちと伝統文化の素晴らしさを発信していくに違いない。

参考資料

気温・降水量・日照時間・湿度



<気象庁データより作成>

大気状況

一般局（東中学校：SO₂・NO₂、彦根市役所庁舎屋上：SPM）年平均値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
二酸化硫黄 (ppm)	0.003	0.004	0.005	0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.003	0.003
二酸化窒素 (ppm)	0.024	0.023	0.023	0.022	0.022	0.022	0.022	0.023	0.020	0.020
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	0.024	0.030	0.028	0.025	0.013	0.032	0.081	0.014	0.020	0.022

<「彦根市の環境」>

水質状況

生物化学的酸素要求量 (BOD) 測定値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
芹川 (下流) (mg/l)	1.9	1.1	1.9	2.0	1.8	2.3	3.6	4.0	4.9	2.1
矢倉川 (mg/l)	1.6	1.8	2.2	2.5	2.0	2.5	2.5	3.0	3.1	1.3
犬上川 (下流) (mg/l)	1.6	1.8	2.8	2.7	1.9	2.7	2.9	3.5	5.3	2.1
大川 (mg/l)	1.6	2.3	2.1	1.6	1.4	2.9	3.3	3.1	4.4	1.6
不飲川 (mg/l)	1.7	2.5	1.3	2.1	1.5	2.6	2.3	3.0	4.5	2.4

<「彦根市の環境」>

公害苦情

(件数)

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
大気汚染	54	37	39	46	30	33	11	12	30	19
水質汚濁	26	15	25	26	17	20	5	7	8	5
騒音	12	7	9	12	5	8	9	5	8	4
振動	0	2	3	0	3	1	0	0	0	2
悪臭	21	6	12	11	18	10	7	5	3	8
土壌汚染	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
地盤沈下	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	14	14	22	32	18	6	2	2	11	13
総数	127	82	110	127	91	78	34	31	60	51

<「彦根市の環境」>